

『韓国写真史 1631-1945 崔仁辰』(犬伏雅一 監訳)について

吉川直哉

1. 東アジアにおける日韓中の写真

アジアの写真において、おそらく貴重な一冊となる『韓国写真史 1631-1945 崔仁辰』の日本語訳が刊行された。2015年は日韓国交正常化50周年であり、今後さらにあらゆる面での交流が盛んになることが切望される。この訳書は両国間の文化における相互理解のひとつとしても意義深い存在になるであろう。

本書について述べる前に、筆者が写真家、写真の教育者として立ち会ったことがあるアジアにおける写真交流の現場を挙げておく。筆者が初めて訪韓したのは1984年3月である。同年9月には韓国の国家元首として初めて全斗煥大統領が訪日が実現し、日韓新時代の幕開けと言われた年である。4年後のソウルオリンピック開催へ向けて街全体が工事中という印象を持った。それ以降、現在までの数十回の訪韓で最も印象深く記憶に残っているのは、1996年12月に韓国の写真の教育者と筆者が共同企画した「第1回アジア青年写真ワークショップ」(図1)である。インターネットやメールがまだ普及していない時代のことであるから、国際電話とFAXで連絡を取りながら準備を進めた。両者ともに未経験のことで現場では多少の問題も生じたが、日韓の学生と教育者などが約一週間昼夜を共にして講演やワークショップを開くという有意義な経験になった。恐らく若い世代を対象にした両国の写真交流としては史上初ではなかっただろうか。さらに、筆者は現在まで数多くの交流展への出品や個展の開催、シンポジウムへの出席を通して数多くの交流をしているが、特筆したいのは、その大半が大阪芸術大学で留学経験をした方々の支えによるものである。それは筆者固有の経験ではない。写真学科と韓国の

写真との関係は長く、そのエピソードについては『写真家 井上青龍の時代』⁽²⁾のなかでも詳しく紹介されている。現在では、大学間の交流写真展や交流事業のほか、日韓の高校生による写真交流⁽³⁾も活発に続けられているなど、あらゆる組織や団体と個人で日韓の写真交流は盛んである。また、筆者も



図1 韓国との交流を報じた1996年12月12日付の朝日新聞記事。

参画する日中韓の大学生の写真交流プロジェクト⁽⁴⁾は三カ国の教育者による個人レベルの交流から発展したものだが、大規模な展覧会が中国、韓国、日本で開催されるまで発展している。

2002年以降、筆者は今度は中国各地の大学から招かれることが多くなった。それは中国の各大学で教育者としても活躍する韓国人写真家と筆者との友情から発したものだが、急伸した中国の経済の影響も大きい。韓国の場合と同じように交流展、特別授業、講演会、シンポジウムを目的としたもので、国立、私立の大学から招聘され、そこで中国各地の大学から集まった教授陣と交流した。印象深かったのは、中国の大学における中韓の関係である。中国の大学では、中韓間で留学生や教授派遣などの交流が目立った。中韓両国は1992年の国交正常化以降、物流はもちろん人の往来がととても活発になった。韓国の最大の輸出相手国は中国で、対日本の3倍以上あり、人物の往来も2014年には一千万人を越え(産経新聞2015年4月11日)、両国の関係はますます濃密になりつつある。例えば記憶に新しい日本の韓流ブームは、「カンリュウ」と日本語読みせず「ハンリュウ」と呼ぶ。つまり日本よりも先に中国など中華圏へ紹介され、歓迎されたことを示している。

もうひとつ筆者が中国の各大学を訪問して驚いたことは、日本の現代写真についての関心がとても高いことである。各大学の教授や学生は、日本の現代写真について豊富な知識を持ち、日本の写真家とその作品について筆者が多くの質問を受けた。20世紀後半から、欧米の美術館やギャラリーで中国を中心にアジアの写真家の展覧会が開かれ、雑誌誌面で作品が積極的に紹介されることが増えた(図2)。一方、日本では中国の写真はあまり紹介されていないのが現状である。それは、後述のように日韓間でも同様だと言える。



図2 中国の現代写真を特集をしたドイツの写真雑誌

2. 日本における韓国の写真

写真と写真史の研究は世界中を見渡しても欧米の文献が多い。その理由のひとつに、写真術発祥の地であるフランスやイギリスと20世紀に飛躍的に写真文化を発展させたアメリカで研究が盛んなことがある。特にアメリカでは、1940年にニューヨーク近代美術館が世界初の写真部門⁽⁵⁾を設け、美術館や大学等の研究機関における写真の研究は早くから始まった。当然ながら、日本で写真と写真史の研究を行おうとすると、英語やフランス語の原書、またその訳書を紐解くところから始めなければならない。それら欧米の研究によると、たとえば写真原理の原型であるカメラ・オブスキュラの源流は古代ギリシアへ求めることが多い。ところがそれは古代中国にも存在していたらしいことが近年わかってきた。たとえば、1980年代後半に筆者が入手した『中国撮影史話』(中国社会科学院新聞研究所・伍素心 編著、遼寧省美術出版社、1984年)と本書の参考文献にも挙げられている『中国撮影史1840-1937』(胡志川・焉運増など編著、中国撮影出版社、1987年)で詳

しい記述があり、日本の研究誌にその一部が紹介された⁽⁶⁾が、それらがまとめて紹介されたことはない。

日本における韓国、中国（香港と台湾を含む）の写真研究については、アジア初の写真美術館として1995年に開館した東京都写真美術館編集の『asian view—躍動するアジア』⁽⁷⁾（図3）で巻末に日本・台湾・韓国写真史年表[1985-1995]がまとめられ、貴重な資料のひとつとして挙げられであろう。現代写真では、『「人（サラム）・風（パラム）韓国現代写真の地平 Horizon of Contemporary Korean Photography』⁽⁸⁾のほか、リクルートのギャラリー、ガーディアン・ガーデン⁽⁹⁾が『6人の若い作家たち・ソウル発写真通信』（2003年6月2日～6月19日）、『韓国若手作家による「4つの方法」展』（2009年6月8日～7月2日）、『等身大の韓国写真 2013』（2013年10月28日～11月21日）等の展覧会の企画を通して積極的に紹介している。さらに、公益社団法人日本写真協会による2003年の「東京写真月間2013」のなかで、『20代作家の挑戦 IN & OUT 日本・韓国（The Eye of Young Photographers IN & OUT - JAPAN・KOREA）』（東京都写真美術館2003年5月30日～6月15日、新宿ニコンサロン、2003年6月10日～16日、コニカプラザ2003年6月10日～17日）という企画展を開催し

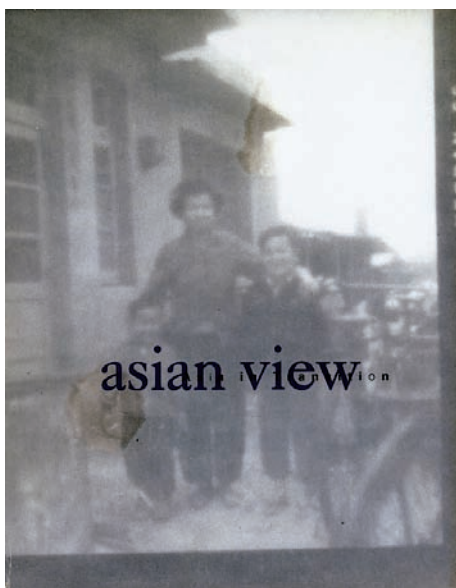


図3 エイジアン・ビュー展の図録

たことも記憶に新しい。さらに最近は、アジアの写真家の作品を積極的に紹介するギャラリーもあるが稀有な存在である。

写真と写真史の研究についても同様のことが言える。日本と韓国は地理的にも近く、歴史的にも関係が深いにもかかわらず、大きな交流や共同研究はほとんどない。ところが韓国では日本の写真家の作品や写真の文献は比較的多く紹介されていると言われる。韓国は1981年からの私費留学生に対する留学試験制度の免除（後に何度も制度が変更）やオリンピック開催を目前にした社会の国際化から1980年代に留学生が急増した。写真分野に限定した正確な統計はないが、日本国内の教育機関で写真を学ぶ留学生も急増したと思われる。その留学生によって、日本の写真が韓国へ伝えられたことが日本の写真家とその作品や写真（史）研究について、韓国で紹介されることが増えるきっかけになったのではないかと推測できる。韓国を取材した作品を数多く発表し、韓国国内でも作品発表があることで、作家名と作品が知られている桑原史成氏を除いても、早くから細江英公氏、荒木経惟氏、森山大道氏等の日本人写真家とその作品が韓国で知られている。2002年の「FIFA ワールドカップ」日韓共同開催や2000年以降の「韓流ブーム」の影響もあって両国民が抱く互いの印象が変化して、日韓間における芸術文化の交流が増加するとともに、韓国の写真家とその作品が日本でも紹介される機会が増えたものの、まだ十分に知られているところには至っていない。

3. 『韓国写真史 1631 - 1945 崔仁辰』(図4)について

本書について述べる前にまず著者の崔仁辰氏について触れたい。著者略歴によると、崔氏は1941年全羅南道に生まれ、大学卒業後に東亜日報記者を経て編集局写真部長を歴任している。東亜日報は日本統治時代の1920年に創刊され、朝鮮日報、中央日報に続く韓国の三大日刊紙のひとつで、90万7090部（韓国ABC協会、2013年）を発行する。崔氏は早



図4 ダンサー崔承喜の写真が表紙の『韓国写真史』

い時期から写真のアーカイブに関心を持ち、退職後は1978年に「韓国写真史研究所」を開設し、韓国の写真史を掘り起こす研究を続けてきた。韓国の写真史についての著書も多く、韓国写真史の研究では先駆者のひとりだと言える。

本書は1631年から1945年の韓国写真史を研究書である。1631年からとされるのは、撮影、記録の道具としてのカメラの原型であるカメラ・オブスキュラの原理が韓国へ伝来したという記録に起因している。李氏朝鮮の第16代仁祖の長男、昭顯世子（ソヒョンセジャ、1612～1645）が、政治的な人質として中国に送られた。後に釈放されて帰国する際に、中国で布教していたドイツのイエズス会士、アダム・シャル・フォン・ベル（Johann Adam Schall von Bell, 1591～1666、中国名：湯若望）から漢訳された科学書を寄贈されて持ち帰った。その文物のなかにカメラ・オブスキュラに関する書『望遠説』（1626年）は含まれていたのだという。文中でも指摘されているように、写真原理の韓国伝来は、他諸国と同様、西洋からの諸々の技術伝来がそうであったように、当時の歴史的な背景や世

界情勢から偶発的に起きたものである。

写真伝来について注目すべき点はほかにもある。第3章の2で「アジア地域の写真の伝来」についての記述である。日本では1980年代以降、日本への写真伝来の研究が注目され、また重要な資料がいくつも見つかり、それらが検証され考察されてきたが、アジアの歴史を顧みてもわかるように、17世紀以降の日韓中の近現代史は一国だけで語るができないと言えるほど複雑に入り組んだ関係にある。同書はそれら東アジアを俯瞰するような視点からの記述があるという点で新鮮である。さらに、大陸と地続きである朝鮮半島という地理的条件からも、中国やロシアとの交流から写真の韓国伝来が起こるといふ考察も興味深い。そして、日本と韓国の関係を鑑みた視点からの写真術の伝来についての考察は日本ではあまり言及されることは少なく、そういう論点からも本書は日韓両国（さらに日韓中間の）の写真史の共同研究の必要性を認識させるものとなるだろう。さらに、これまで欧米中心に編纂されてきた写真史、とりわけ黎明期における写真原理の伝播についての空白を埋める研究として意義深い。

写真原理の源泉についてももうひとつ大きな研究がある。photographyに該当する呼称を写真とした歴史言語学からも論考し、その定義にも言及していることである。本書によると、写真という呼称はphotographyの機能を理解し受容した上で創案した呼称ではなく、肖像画として朝鮮半島に存在していたということである。photographyはギリシア語のphotos（光）とgraphos（描く）の合成語というのが通説だが、東アジアに置いては各国の共同研究が十分でないこともあり、現在、日本や韓国で使う「写真」という呼称の由来には諸説がある。日本からの伝来だという説が有力であるが、本書のなかで崔氏は、朝鮮半島において肖像画を示す写真という呼称が先に存在し、肖像画を示す言葉を広義でとらえて、photographyを写真とされたと書いている。現在は、中国語を含めて世界各国の言語では光に関係する呼称が定着しているが、日本と韓国だけが写真という言葉を使うことから、さらなる日韓の共同研究が望まれる。

言うまでもなく韓国の歴史は1910年からの韓国併合という

日本統治を抜いては語れない。その間の写真史についても本書は貴重な資料とともに詳しく記述している。例えば韓国内における日本人の写真活動が豊富な資料とともに記述されており、日本の写真史を研究する上でも貴重である。なかでも、営業写真師とアマチュア写真家の区別をせずに在韓日本人が1904年に結成した写真団体「韓国写友会」、1934年に朝鮮総督府と京城日報社の支援で結成された「全朝鮮写真連盟」など、日本人のアマチュア写真愛好家による活動の記録は大変興味深い。このように写真師とアマチュア写真愛好家の区分をせず、さらに趣味と報道と商業とを含めた機能を持つ写真文化の姿は日韓に共通して固有の傾向であり、現代へと続くものだとも言えよう。本書によると、韓国人のアマチュア写真愛好家が日本人が主宰する写真団体による撮影会や公募展へ積極的な参画があったということだが、その一方で、日本統治下の韓国人による写真団体はその活動に厳しい統制や規制があり、解散令によって解散を余儀なくされた団体もあったという。

もうひとつ筆者が目にしたのは、東光写真学院、朝鮮写真専門学院、京城キリスト教青年会(YMCA)学校写真科(後の京城写真学講習院)などの写真教育機関の存在であり、それらは、「写真師だけを要請するプログラムで教育をしたのではなかった。」(第9章1 アマチュアの登場、P.338)のだという指摘である。これらの教育機関が実用的で生活の一部として写真を大衆化させたのではなく、表現としての写真の発展に道筋を付けたという観点は、それらを受容したとするアマチュア写真愛好家の存在意義や写真の社会化という点からも写真文化を考察する上で重要な論点である。当時は日本国内でも写真教育の黎明期であり、1915年に東京美術学校に写真臨時科が開設(1926年に東京高等工芸学校へ移管)され、オリエンタル写真学校(1919年開設)、小西写真専門学校(1923年開設)等があった。一方、韓国では1926年には写真界に女性の進出を願って写真科が槿花女学校に開設されていたとあり、日本国内では女性のための写真教育の機関は皆無であったことと比べ、大変興味深い。さらに、第7章6を「女性写真師」で、女性の写真師について記述している。な

かでも、当時の男性主体の写真館の世界と閉鎖的な社会風習があるなかで、ソウルの仁寺洞に夫婦で写真館を構え、槿花女学校で写真を教えたという女性写真師、李弘敬の活動を高く評価していることは著者の意識が感じられる。

筆者の崔氏が永く身を置いていたマスメディアと写真は不可分の関係にある。マスメディアの発展が写真の技術的な発達を促したことは言うまでもないが、本書のなかで記述されている日本統治下の新聞と写真との関係は、単に歴史的な事象として顧みるだけではなく、現代にも通じる重要な問いかけになるだろう。厳しい規制と暴力的な弾圧、それに抵抗するニュース写真の表現、そしてフォトモンタージュ等によるプロパガンダ、民衆のメディア・リテラシー等、本書読者は報道における写真表現の重要性について再認識をせざるを得ない。そして、それらから改めて写真が持つ大きな力を感じる。

さらに写真が持つ力を示したものとして特に挙げたいのは、韓国において肖像写真を携帯したり掲示をし、その人物を称える習慣が興ったのは伊藤博文の暗殺に成功した安重根(アン・ジュンゲン、1879～1910)の肖像写真を人々が買い求めたことからだという考察である。さらに、それらは日本人が販売していて、独立運動の機運の高まりを警戒した日本が治安妨害として販売を禁止したほどであったといわれ、写真の力を示すエピソードのひとつとして注目したい。そして、本書にはこのような重要な記述がある。

写真は、その受容階層の増加とともに社会的問題に対する役割を担う一方、文化の形態としても発展するなか、慣習的な流通構造が生まれ、それに続いて法律が定められるようになった。(第6章4 写真と法、P104)

これは写真というものが社会に浸透するに連れて、制度的、また文化的にその役割が明確になる必要性を示している。さらに、それに続く「5 写真の複製」とともに写真における普遍的で重要な課題であり、長年に渡って著者が新聞社に勤務した経験が活かしたものであると感じた。本書では、写真師、写真館についての研究項目も崔氏の写真に対する優れた洞察が

顕れている。受容を前提とした韓国への写真伝来に注視し、写真が社会や民衆にどのように浸透していったか、そしてどのような問題を起したかを具体例を資料とともに丹念に拾い上げて考察していることは、崔氏の写真史研究の根幹と言えるだろう。

4. 結びに代えて

日韓の写真史の研究は、黎明期におけるヨーロッパの写真史もそうであるように、写真の技術発達史と写真の文化史や表現史等は不可分の関係にある。さらに東アジア諸国の歴史は深い関係にあることと参照して、個々の国単位で写真史を研究する際においても総括的で俯瞰的な考察は必要である。とりわけ日韓の写真史についてはそのような視点が不可欠である。

この日本語訳によって、本書は、日本語で韓国写真史を読むことができるという点でとても日本人にとって大変喜ばしい研究書となる。巻末の訳者紹介をみると、この日本語訳は大阪芸術大学へ留学した若い世代の研究者による努力の蓄積で支えられている。東アジアの写真にとって、若い世代の写真の研究者は大きな力になるだろう。同時に本書が日本の若い世代に広く読まれることを願う。そして、著者の崔仁辰氏の長年の研究とその日本語訳の企画ならびに監訳をされた犬伏雅一教授の尽力に敬意を表し、本書とその日本語訳が日本写真史はもとより、東アジアの写真(史)研究に新たな光を照らすものになることを確信する。

註

- (1) 韓国済州島、済州青年修練院で1996年12月10日～14日に開催。日韓約40名の写真教育者、高校教諭、学生と台湾から写真評論家の呉嘉寶氏が参加。
日本からは大阪芸術大学の師岡清高教授、沖縄県立芸術大学の

仲本賢教授と筆者が参加。同実行委員会主催。

- (2) 太田順一、ブレーンセンター、2013年刊
ISBN 978-4-8339-054703
- (3) 高等学校文化連盟全国写真専門部が2004年から『高校生写真国際交流事業・日韓高校生写真交流の集い』として毎年交流事業を開催。
- (4) 『2015アジア大学生国際写真展・国際写真シンポジウム 日中韓大学生の視点 アジアの現在』。参加した教員と学生の所属大学は大阪芸術大学、九州産業大学、多摩美術大学、東京造形大学、東京工芸大学、武蔵野美術大学など日本国内から7大学、中国は哈尔滨学院、北京電影学院、中国人民大学、延辺大学など12大学、韓国は中央大学、順天大学、慶一大学、大邱芸術大学など8大学。日韓中37大学から185人の学生が出品して2015年7月3日～7月10日、九州産業大学美術館3Fオープンスペース、17号館4Fフリーアトリエにて開催。これに先立ち、中国黒竜江省美術館にて『2012国際大学撮影芸術展』が2012年6月1日～7日に日中韓26大学から、『2013 International Photo Exhibition of Asian Students』が2013年6月28日～7月5日にソウル科学技術大学ギャラリーにて23大学(日韓中22大学とシンガポールから1校)から参加して開催。
- (5) Department of Photography at The Museum of Modern Art. 1929年開館し1930年から写真作品のコレクションを収集。初代写真部長は写真史家のBeaumont Newhall。
- (6) 写真装置#6(写真装置舎、1982年)『中国写真史話 中国の古書に見る光学原理関係の記述』(P.137～P.143)として中国の写真雑誌『大衆撮影』1981年5月号掲載の記事を長谷川明氏・訳註として紹介。
- (7) 展覧会は東京都写真美術館で1996年1月23日～3月13日に開催。
- (8) <http://www.smt.jp/saramparam/> (2015年8月30日現在) せんだいまディアパークで2002年5月25日～6月19日に開催。
- (9) <http://fcc.recruit.co.jp/gg/exhibition> (2015年8月30日現在) 所在地は東京都中央区銀座7-3-5ヒューリック銀座7丁目ビルB1F。他に中国、台湾、香港の若い写真家の作品展も開催。

図版

- 図1 「アジアの若手写真家 韓国で交流会開く」 朝日新聞大阪本社版41410号1996年12月12日刊。
- 図2 季刊 European Photography 2004/2005 冬号
http://www.equivalence.com/pavillon/pav_ep_76
- 図3 東京都写真美術館編『Asian view エイジアン・ビュー：躍動するアジア= Asian view : Asia in transition』東京都歴史文化財団・東京都写真美術館、1996年。

図4 崔仁辰『韓国写真史 1631—1945』 犬伏雅一 監訳、姜美賢、
洪性雲、朴紀喆、李京彦、金根愛 訳 青弓社、2015年。
ISBN978-4-7872-7375-8
学校法人 塚本学院 大阪芸術大学 出版助成第76号

参考文献

- (1) 吉川直哉「第1回アジア・フォトワークショップ韓国・濟州島で開催」、
『アサヒカメラ』NEWS IN&OUT、朝日新聞社、1987年3月号。
- (2) 吉川直哉「『第1回アジア・フォトワークショップ・イン・チェジュ96』レポート」
『日本写真芸術学会誌』、平成8年度第5巻第2号。
- (3) ジェトロ世界貿易投資報告2014年版第2部国・地域別編I アジア・
大洋州。
<http://www.jetro.go.jp/world/gtir/2014.html>
(2015年8月30日現在)
- (4) The New York Times, “Beaumont Newhall, A Historian of
Photography, Is Dead at 84”, February 27, 1993.
<http://www.nytimes.com/1993/02/27/arts/beaumont-newhall-a-historian-of-photography-is-dead-at-84.html>
(2015年8月30日現在)
- (5) 長島万里子「韓国の留学生政策とその変遷」、ウェブマガジン『留学
交流』2011年4月号vol.1 独立行政法人日本学生支援機構。
<http://www.jasso.go.jp/about/documents/marikonagashima.pdf>
(2015年8月30日現在)
- (6) 『桑原史成写真美術館』ホームページ。
http://www.town.tsuwano.lg.jp/kuwabara_photo/
(2015年8月30日現在)
- (7) 『最近の日韓関係』平成27年6月外務省東北アジア課。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000033344.pdf>
(2015年8月30日現在)
- (8) 谷口知子「『望遠鏡』の語誌について」近代東西言語文化接触研
究会会誌『或問』第1号関西大学。
<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shkky/wakumon/no-01/no-01-taniguti.pdf>
(2015年8月30日現在)